

「令和7年度 舞子高校の先生に震災当時の記憶をインタビュー」

環境防災科生徒の有志が、今年度着任された先生に阪神・淡路大震災の体験をインタビューし、冊子を作成しました。体験された方から直接お聞きした話を知っていただき、これからの防災・減災につながることを願っています。ぜひご一読ください。



令和7年
インタビュー

1人の声を力に

～舞子高等学校教師の
阪神・淡路大震災当時の記憶～

メモリアルアクションKOBÉ

目次

はじめに.....	3
-----------	---

インタビューした先生方

① 教頭先生	4
② 池嶋先生	5
③ 池原先生	6
④ 伊藤先生	7
⑤ 加藤先生	8
⑥ 先田先生	9
⑦ 坂本先生	10
⑧ 佐野先生	11
⑨ 塩田先生	12
⑩ 成末先生	13
⑪ 西川先生	14
⑫ 松田先生	15
⑬ 吉本先生	16

はじめに

私たちは「災害メモリアルアクション KOBE 舞子高校チームインタビュー班」です！

これは、*「災害メモリアルアクション KOBE」に参加していた環境防災科の生徒が、昨年度と同様に、阪神・淡路大震災当時についてインタビューを行い、まとめたものです。震災を経験されている方には当時の様子や心の変化、経験されてない方には学生時代に学んだことや、震災のお話を聞いて対策したこと、両親の当時のことについてお聞きしました。この冊子を読んで、私たちの世代や、これから活躍していく若者が震災について知り、近い将来、発生するといわれている南海トラフ巨大地震に備えるきっかけにしていきたいです。また、この冊子は読み手に温かい印象を持ってもらえるように手書きで作成したので、その部分もご注目ください。

* 2025年1月11日で完結しました。

災害メモリアルアクション KOBE とは

阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという思いから、学んだことを次に活かすことができる形をつないでいこうという取り組みです。

詳しくはこちら↓

https://www.dri.ne.jp/wp/wp-content/uploads/memorial_concept.pdf

教頭先生

震災当時(23)歳
社会人1年目

住升 淡路市 津名町
実家が定食屋さん



まちの状況

余震が1か月以上続いた
平地だったが感覚は
斜めっており、常に揺れている
感じがした。

支えになったこと

お客さん
「なんでもいいから作って売って」
父が震災の翌日にお店を
営業開始した
お客さんのおかげでがんばれた
家族だけで約3日間続けた。

生徒へのメッセージ

自助をまずは一番に考えてほしい。
どのような行動を取ればいいのか意識して、
家族の命を守りたい。

心の様子

情報がなすぎて困った
不安く困る
混乱

震災後、先生の中で 変わったこと

混乱と自分の中の承認が
出来なかったから「封印したい」
と思っていた

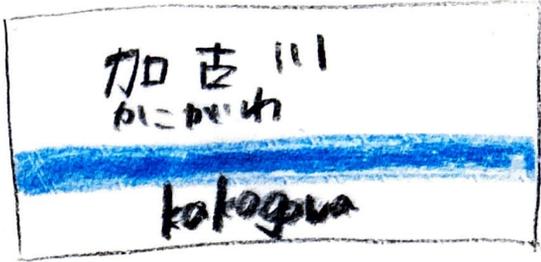


インタビューのアポ取りの時に
「話そう」と思った。

(池嶋)先生

震災当時 (13) 歳 中学1年生

住んでいたところ (加古川)



当時の様子

家の壁がひびき、物が倒れたり、食器が倒れたりした。1月17日は学校に行けた。先生自身はそんなに被災してはいなかったが、家に帰ると、NEWSで長田の火事の様子を見て、大変だと思った。

心の支え

直接の被害は、たかがたか、生活は変わりがあっても大丈夫だよ。

震災後、先生の中が変われたこと

昨日と今日の違い

日常生活、当たり前前のことか奪われる。当たり前前は当たり前じゃないことの実際。

生徒へのメッセージ

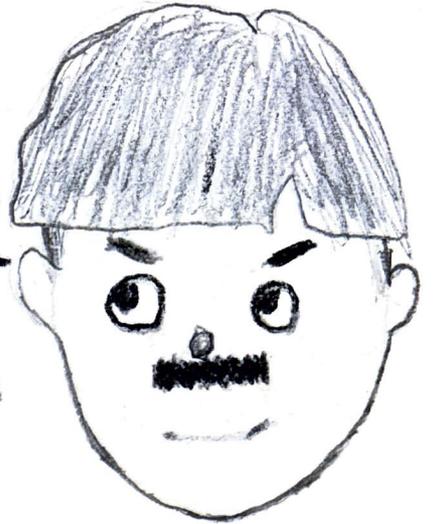
いつか必ず、何かあるから、何かからじゃないから、1日1日を、大切にしてください。



池原先生

震災当時 小学5年生

住み 神戸垂水区



被害状況

インフラが止まって
生活ができなない。
電気はすぐに復旧
したが、水道とガス
が止まっていたため
風呂に入れなない。

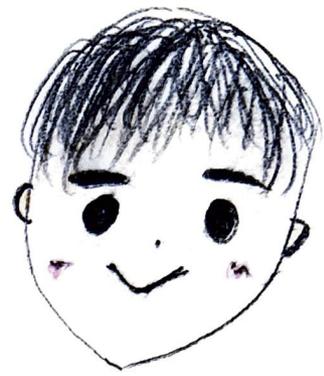
まちのようす

学校は1週間
休校になった。
小学校には給水
車が来てくれた。

心の支え

自宅に大きな被害がなく、
家族も全員無事だったので、
家族と一緒に住み続けられ
たことが、幼い自分の心の支え
になった。

伊藤先生



震災当時 35, 36歳

住み 明石市東二見

まわりの状況

周りは断水していたが、「住んで」いたマンションが丈夫だったから断水しなかった。
大きな被害もなく、新幹線が止まっていたくらい。

心の様子

地震発生直前に目が覚めた。
→ 数十秒後に揺れた。
→ 揺れで目を覚ました奥さんに地震のことを伝える。
「怖いよ」という言葉がけをされた。

支えになったもの、こと

大きな被害がなかった分、自分が支えないといけない立場。
→ 兵庫高校が避難場所となったから、ボランティアとして申しこんだ。

震災後、先生の中で変わったこと

(前) 作っていた。
→

(後) 防災白くろ

生徒へのメッセージ

地震予知は不可能



できることは防災

1人でも多くの命を救ってほしい

自分へのメッセージ

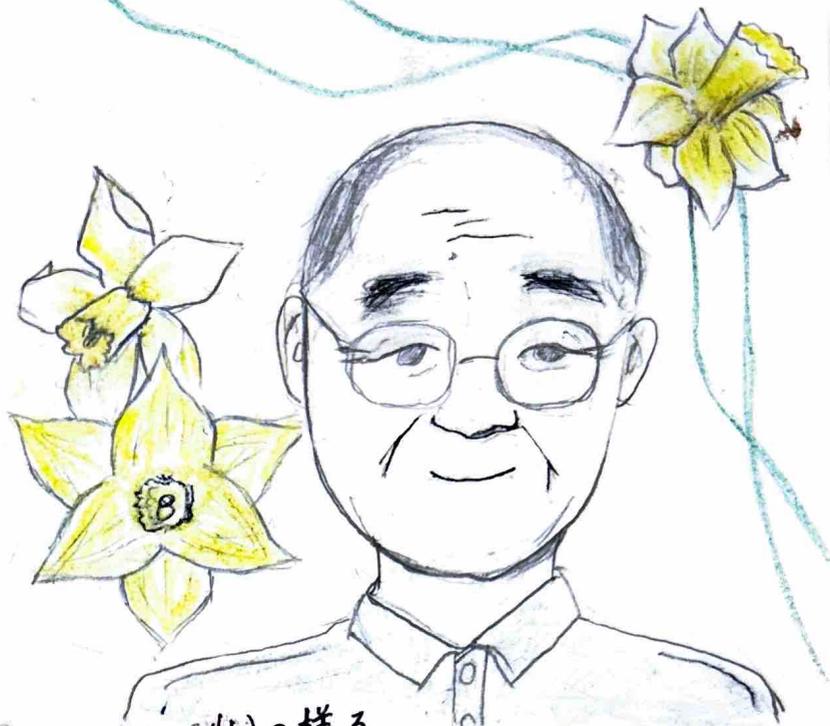
助けられる側になるように
防災の準備を行うこと。

家具の配置！つっぱり棒！

加藤先生

・震災当時(35)歳
教師

・住み 三木市志染町



・まちの状況 

- ・外へ出ると、ガラスが足に刺さった
- ・マニホールが水を吹き出した
- ・周りの屋根が崩れていた。

・支えになったこと

当時は一人暮らしだった。
父から「生きてるぞ」と
安全確認されたことに安心した

・心の様子

初めは「ただの地震」かと思っていたがテレビやラジオで神戸の様子を知った。

自分が何をしていいのかわからなかった。

・震災後、先生の中で変わったこと。

小さな余震にも身を屈める窓ガラスから離れることは無意識のうちに行動するようになった。

・生徒へのメッセージ

「生きる」ことを第一に。

自分の身を守る事ができない人間に人を守ることは出来ない

「落ち着いて、自分の身を守る」これを大切にしてほしい。

先田先生

震災当時 = 生まれていない
住み = 淡路島



<母のはなし>

ちょうど帰省中だった。家に被害
があったけど仕事に行った。
しかしすぐ家に戻り片付けなど
をした。

<父のはなし>

洲本市に住んでいて、震源地の近くだった。直後は
家族の安否確認へ行った。スマートフォンがすぐ
売り切れでいたことが印象に残っている。

<先生が話を聞いて思ったこと>

直下型地震だからこと家族は生きている。安否確
認に行っている父の話を聞いて、自分もそのときの被
害者の状況に合わせに行く。

<生徒へのメッセージ>

南海トラフはいつ来るとわかっていいるからこと
しっかり備えておこう。ただ、日付け、曜日など
予知ができておるわけはない。いつきても大丈夫な
ようしっかり備えよう。

坂本先生



✎ 震災当時 6歳

✎ 住み 但馬・新温泉町

被害状況

特になかった。揺れも感じず、普段通りの生活を送っていた。

どう思ったか

他人事のように感じていた。学校で教えられたことも想像がつかず半信半疑だった。沿岸に住んでいたが、東日本大震災が発生するまで、津波について学ばなかった。今思い返せば、学ぶべきことだった。

変わったこと

子どもができてからは、漠然と大丈夫だと思っていたことも具体的な備えを考えるようになった。家は耐震設計にし、年に2回は備蓄を見直すようにしている。

これから

出先や1人での状況などを想像し、それぞれの避難行動を考える。避難場所や集合場所を決め、子どもに教える。

生徒へメッセージ

私自身も震災を経験しているわけではないので生徒の皆さんとあまり変わりません。経験していない人が備えるためにも語り継いでいってください。

佐野さん

震災当時 32歳

住み 妙法寺



被害状況

1階ではテレビが倒れたり、棚から物が飛びだしていった。電気はついたがガスは止まっていた。

まちのようす

外に出てみると板宿のあたりが黒くなっていて火事だと思った。

震災直後

大事になっているとは思っていなかった。水が止まると考えて水をためた。

心の変化

当時は神戸のまちはもう復興できないと思っていたが、前よりも良いまちに変わって人間の力強さを知った。

生徒へメッセージ

いつ災害が起きるか分からないので、他人事と思わずに備えておいた方が良い。

塩田先生



震災当時の年齢：22歳 大学4年生

住んでいたところ：大阪府能取町

持ち家の様子

当時、学生寮のマンションの2階で
一人暮らし。

食器は落ちて散乱。
持ちに変わった様子はなかった。

心の様子

一人でいることに不安や焦りを
感じた。

同じマンションに住む友達に
電話しよう。

心の支えになったこと、もの

同じマンションに住む友達

何かあった時に安心し合える存在。

一緒にいることができた。

震災前後で変わったこと

前

~~備えなし~~



後

家族も自分もタンスが倒れないよう、
固定するようにしている。

非常用持ち出し袋を用意している。

当時の自分へ

日頃から人とのつながりや
何かあった時に助け合える
人がいることが大切。

生徒へ

いつ、何が起きるかわからない
から、防災知識や行動力、
備えを知っておく必要がある。

あとからお聞きしたこと

2日後に帰省する予定があった。夜中にも関わらず、車が渋滞していた。

成未先生



震災当時の年齢：まだ生まれていない

◎これまで「震災とど」のように関わってきたが
小学校での防災教育、語り部からのお話
両親からのお話
↳少し揺れた、小学校に逃げた。

◎震災について学び、感じたこと
とてもショッキング。
単戦争の時のまじの様子に似ている、こわい。
現実じゃない。

◎先生が取り組んでいる「備え」
棚を固定する。
棚を寝室に置かない。
保険証などをまとめたものを持っている。

◎生徒にかける「言葉」

語り継いでいけるのは私たちだけ。
被災者が減少している今、私たちが記憶をつたぐ
必要がある。
戦争の記憶が受け継がれるように、震災についても
事実を伝えていかなくてはならない。

西川先生

震災当時 4歳

住み 大阪 泉佐野市



阪神・淡路大震災に
関する授業を受けて

被災したときは泉佐野市に住
んでいたが、父の転勤で兵庫へ
→ 周りほとんどみな経験している
→ 辛い前提での授業が辛かった。

お父さん お母さんの
当時の様子

父 = 普段通り仕事へ
母 = 17時早く起きた〜

前任校は 3年Aクラス 校である松陽高校!
そんな松陽高校で様々な活動を行ったのか

- 元々はボランティア部の一環として行っていた
- 募金活動 ○ 学校内での防災イベント ○ 火災ま出し
- 自衛隊を招いてのイベント

生徒へのメッセージ

1対1で話をとかかいたとしても、
大勢の前になるとその良さが
発揮できなくなる
もっと魅力を伝えていってほしい。

自分へのメッセージ

最初に勤めた学校が、川の
氾濫がある地域だった。
→ 一度は経験している子もいる
そんな中で自分は阪神・淡路
大震災もほぼ経験していない。
→ 何を伝える?
→ 自分が何をできるのか 模索
する。

松田先生

震災当時 10 歳

住み 埼玉県

まちの状況

親戚の話

西宮に住んでいた。
揺れてテレビが倒れたり、家具が移動した。

心の様子

埼玉では何も被害はないのにテレビで被災地では、大きな被害があることに、ショックを受けた。



ABC DEF

English

支えになったもの・こと

親戚に支援物資を送り、遠い距離でも、連絡を取ったりするほど助けたことが支えになった。

震災後、先生の中で変わったこと

(前)

被害は少ないと思っていた。

(後)

思っていたよりも深刻な被害になることを知り、準備をしても防げないものもあると感じた。しかし、これを受け入れて、生活をしていくことが「大事だ」。

先徒へメッセージ

前もって準備をしておくことが大事。
災害が起きた時を、自分のことのように考えてほしい。

自分へメッセージ

時間が経てば忘れがちだが、いつ災害が起こるか分からないため、出来る時に準備をする。昔の経験を生かして、起きた災害について知ろうとしたり、イベントに参加する。

(吉本)先生

震災当時 (29)歳

住んでいた所 (伊川谷のマンション2階)



当時の様子

ものすごい地ひびきがあった。

今までのない経験で、ゴジラがマンションを揺らしている感覚。

妻は布団の中に飛び込んだ。何もできなかった。

震災当時の心の支え

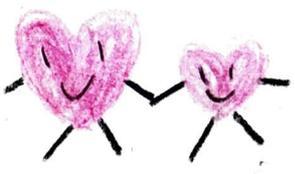
家族の絆

震災後、先生の中が変わったこと

今ある命はみんな生かされているのかもしれない。考えると七転八倒の方をも頑張っていると思う。

自分へのメッセージ

自分の命、他人の命を、大切に守る。それだけ。



生徒へのメッセージ

災害はいつか来るが、分らばいかにして、いつ来ても、いかに準備しておいてほしい。

